

會津八一の歌碑について（西の京）

Consideration about the monument in which I described the Japanese poem of 31 syllables by YAICHI AIZU (Nishi-no-kyo)

小竹 光夫
Mitsuo Shino

要旨

本論は、拙論「一碑百想Ⅰ・Ⅱ」を総論としながら、書文化財の発掘を行っていく営みの一つとして位置付けられるものである。「一碑百想Ⅱ」の「おわりに」では、「万葉集関連書碑」への展開を提案しており、その中でも書者として會津八一を例示している。

會津八一は東洋美術史の専門家という域に留まらず、歌人・書人等々、さまざまな分野で広範かつ深い見識を示した文化人である。各地に数多くの歌碑が建立されているが、特に奈良には思い入れが強かったと見え、県内各地を巡りながら歌を詠み、独創的な文章を残している。本論ではそれらを紐解きながら、万葉の世界へのアプローチを試みようとしている。

キーワード：會津八一 歌碑 西の京

はじめに

安藤更生の文献では「書豪」と称せられる會津八一ではあるが、その書は決して伝統的な書風を継承するという安易なものではない。いわば独立孤高、反骨の気概を示すがごとき独特の書きぶりを示す。古典を基軸とした学書によって育ち、その後は展覧会に出品を続けていた論者にすれば、かなり遠い立ち位置にある書でもあった。

そんな會津八一の書との出会いは、論者が大学生であった頃である。万葉集の講義担当者であった万葉学者伊丹末雄氏が、万葉集の解説をする中で會津八一に何度か言及され、学問の概略とその人となりに触れられたことを印象的に記憶している。ただし、浅学の身である論者には、学問的な内容を理解するまでには至らず、度々口にされた「何かというと絶交を宣言し、友と交流を断った」との逸話をもとに、「気難しい学究の人」とのイメージを固定化していった。伊丹氏自身、『會津八一をめぐる思出』（1978年9月）、『會津八一と吉野秀雄』（2011年8月）等の著述もあることから、別の機会に會津八一との関係性については改めて確認しておくことが必要であろう。伊丹先生に直接お伺いしたことはなかったが、その当時、触れられる口調からは好感を感じるとはなかった。

周知の通り、會津八一は仏教美術史の研究者としての卓越した存在を示すとともに、歌人・書家としても圧倒的力を発揮した。ただし、後述する通り早稲田大学英文科の卒業であり、新潟の有恒学舎（現在の新潟県立有恒高等学校）の英語教員として勤務しており、美術史を早稲田大学で講ずるまでには、かなりの道のりがある。現在相当数の歌碑が奈良には建立されているが、仏教美術への研究が風土や文化、とりわけ「万葉」への関心を深めて

いったと考えられる。

本論では、そのような會津八一の奈良への接近を論述するとともに、建立される幾つかの歌碑に焦点を当てながら、彼の書に対する分析と考察を加えようとしている。

1. 會津八一の書との出会い

「はじめに」でも述べているように、論者は會津八一とは決して好意的な出会い方をしていない。恐るべき研究者であり、「書豪」とさえ称せられた人物に対して、恐れを知らぬ不屈きな物言いではあるが、伝統的な学書法で育った人間にとっては、当たり前とも言える対応であったと、当時のことを思い起こしている。つまり、書学（とりわけ実技による書表現）に関わる人間にとっては、自らの表現の礎となる古典や表現には執着するものの、対岸にある表現に対してはかなり無頓着で、殊更の関心を持つとする意識すらない。当然のこととして皮相的な学びと非難はされるだろうが、若輩の人間が世に打って出ようとするには、ある意味で仕方のない学書法であると考えられるからである。学生時代、中国の明清の行草作品に埋没していた論者にとって、中国の王鐸や張瑞図、そして呉昌碩らの古典は神品ではあったが、會津八一の書への目配りがなされることは少なかった。

そのような中、書の理論を学ぶ上での必須図書として紹介されたのが、『會津八一書論集』であった。表現を支える書論の学びではあったが、「書を学ぼうとするなら、明朝体活字を習え」と説くような會津八一の書論は、あまりにも奇異なものと思えず、到底、受け容れられるものではなかった。当時、数点の書作も目にはしたが、それとて受け容れるだけの土壌を持ち合わせていなかった。

會津八一と正面から向き合うようになったのは大学教員になってからであるから、極めて後発浅学の一人として繋がり始めたということになる。最初に目を止め、そして衝撃的な打撃を受けたのは「学規」と呼ばれる作である。それは遙か昔の高校時代に出会い、恐るべき筆力に圧倒された高村光太郎の書のような書線の見事さを誇っていた。我々が書き続けてきた明清の行草書のような表層的な書美を呈するのではなく、深い精神性を感じさせる鋼鉄の書であった。

「学規」には、以下のような四則が掲げられている。

学規

- 一 ふかく この生を 愛すべし
- 一 かへりみて 己を 知るべし
- 一 学藝を以て 性を 養ふべし
- 一 日々 新面目 あるべし

大橋一章は、その著『會津八一』の中で「学規」に触れ、詳細な解説を加えるとともに、以下のような結論付けを行っている。

會津は学規四則が学生たちに人間の生き方としてきわめて厳粛であるべきことを要求し、自らも実行して範を示さんことを期したのである。戦後、新潟に隠棲してからは、「けつきよくこの学規は、私自身のために私がつくつて、書いて、そして自分を警しめるだけのものになってしまった。それから四十年にも近く、今の老境にはいつても、いつも親しくなつかしい」と思い起こすのである。

會津は人生に対する姿勢はいかにあるべきか、その指針として学規四則をつくり、学藝をその実践活動の中心に据えることにした。おそらくこのころ、會津自身が学藝に没頭し、自身を深めていたのだろう。

同『會津八一』の巻末に掲載される年譜によれば、この「学規」は大正三年（1914）八月に作成されている。同

年の他の記述を拾えば、

三月頃、小石川区高田豊川町五十八番地に転居する。四月、早稲田大学高等予科（商科）にも出講、英文学科ではラスキンの「ヴェニス石」を講じる。八月、「秋艸堂学規」四則をつくる。同月と十月、「落日庵消息」を『新潟新聞』に十四回連載。十一月頃より古代ギリシャの研究、講義を自宅にて行う。

となる。會津八一33歳、まさに研究者としての進化を始めんとする時期でもある。「学規」で言われた「生」と「性」の二語に注視した戒めは、100余年の時間の経過を感じさせないほどに今も斬新で、何かを探求しようと試みる人々を励まし続けていると感じられる人生の指針でもある。

歌碑との出会いは、以下のような偶然からである。



図1 法華寺 戒壇石



図2 法華寺 會津八一歌碑

高校時代、論者は指導者であった久米公氏に連れられ、奈良一条高校との書道部の交歓会で奈良市を訪れた。その際、一条高校の近隣にある法華寺に立ち寄り、門前にある戒壇石（禁牌石、結界石）を指差されて、由来や『酒肉五辛門内に入るを許さず』（図1）と読むのだ…との説明を受けた。書を学び始めたばかりの時代である。歴史や宗教を含めた文化というものに触れ、興味関心という以上に「恐ろしさ」を垣間見る思いがした。ある意味、そのような指導者の

一言一言が書への道へと誘ったのであるが、後日、その記憶を頼りに法華寺を訪ねた折、昭和40年（1965）建立の會津八一の歌碑（図2）に出会うこととなる。

碑面には、

ふちはらの おほきさきさを うつしみに
あひみるごとく あかきくちびる

という歌と「法華寺にてよめる 秋艸道人」との添え書き、碑陰には「昭和四十年十一月三日 入江泰吉 光枝建立 石工石田忠一」と刻まれている。山崎馨の『會津八一の旅』によれば、碑陰は安藤更正による筆であるという。加えて、

写真家入江泰吉とその夫人光枝との発願であることが知られる。歌碑の文字は入江泰吉所蔵の道人自筆の原稿により、碑石には願主が苦心して探しあてたといふ香川県木田郡庵治町産の庵治石が用ゐられてゐる。

下部に二本の白線があり、亀裂かと思える人もあるらしいが、これが庵治石の特色であるといふ。

との解説が加えられている。

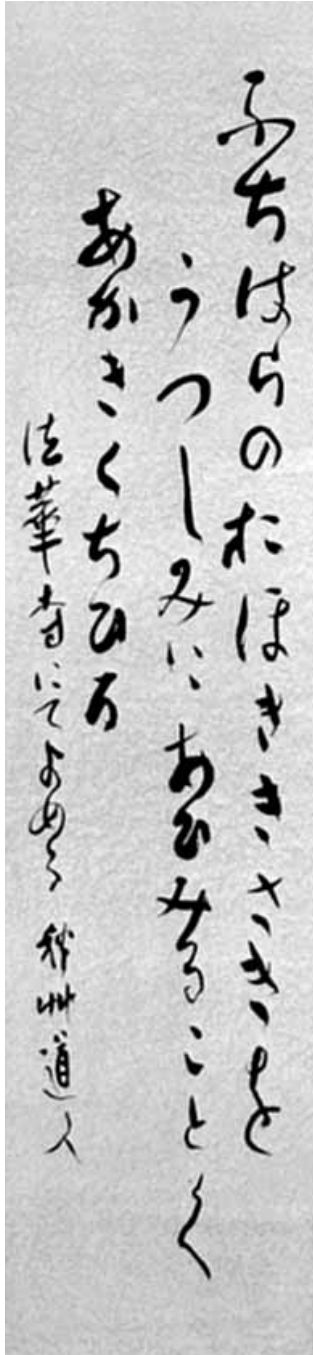


図3 法華寺歌碑墨書

表門に佇むだけで、その風格を感じとることができる法華寺である。格式高い門跡寺院の象徴とも言える筋堀を背にして、現在は「総国分尼寺 法華滅罪之寺」という石標が立つ。前出の戒壇石を左に控えさせる南大門の寺標には「法華寺門跡」との流麗な筆跡が記される。聖武天皇御願の象徴が東大寺（総国分寺）であれば、光明皇后御願の法華寺は総国分尼寺の威厳を示す格式を誇っている。本来は権力者藤原不比等の邸宅であったものを、皇后が受領し伽藍としたと寺伝は伝えている。威厳を示しながらも、まさにたおやかな尼寺の雰囲気を示す美しい寺である。

書に関わるものであるなら周知のことであるが、光明皇后は藤原不比等の三女である。古典として学びの対象となる樂毅論（がっきろん 正倉院御物）の末尾には、「藤三娘（とうさんじょう）」との署名が見られる。その光明皇后所縁の法華寺の本尊は国宝指定を受けている「十一面観音像」であり、伝承として「皇后の御姿を写したものと伝えられることも納得されるところである。実際、「十一面観音像」は直立する威厳ある仏の姿ではなく、体の重心を左足にかけ、僅かに体をくねらせた様子で作られている。超越した仏というよりは、あまりに人間的な姿である。光明皇后は、社会福祉の先駆者としても有名な人物である。現在も寺内には薬草園が存在しているし、その横には病氣や困窮するものに対して施浴を行ったという浴室（からふる）が残されている。

そのような状況下で考えれば、會津八一が詠み出した「ふじわらのおほきささき」が光明皇后を想定しているのは当然であり、その艶やかな姿が本尊「十一面観音像」にオーバーラップされて、妖しの世界の彩りを提示しているとも言えよう。まして、「あかきくちびる（赤き唇）」で歌を閉じるなどの斬新な手法と感覚は、會津八一の面目躍如という見事さであろう。

先に「歌碑の文字は入江泰吉所蔵の道人自筆の原稿により」と引用をしているが、西世古柳平の『會津八一と奈良』には、墨書の画像（図3）が掲載されている。この書物の写真撮影者が入江泰吉と記載されていることから、歌碑の原本であることは間違いあるまい。3行に分ち書きされた見事な書であり、それを刻した石の形態といい、奈良に所在する會津八一歌碑としては、風格ある第一級のものでありと位置付けることができよう。

2. 會津八一について

論者が少・青年期を過ごした広島のは、広島大学教授であった井上政雄（号 桂園）氏が標榜する「教育書道」という考えが中核となり、書を通じて道を学ぶという傾向の中で書学することが求められた。論者の指導者である久米公氏も、その桂園門下の一人として薫陶を受け、一家をなした先鋭の教育者であった。そのため、「教育書道＝道」に触れ、語られる場面も数多くあった。文検書道の合格者であり、かつての国定教科書の筆者であった井上氏が、単なる展覧会芸術を指向した書作を嫌い、「深い精神性を大切にせよ」と説いたことは言を待たない。論者が進学した新潟大学教育学部特別教科教員養成課程書道専攻（略称 特設書道科）の主任教授であった竹内忠雄（号 臨川）氏、助教授であった指導教官三浦康廣（号 秋江）氏も同様で、展覧会芸術に傾斜する我々を何度と

なく戒められ、臨書を中心とした基礎基本の育成を求められた。出会った数多くの指導者に共通する空気を感じさせたのが、本論で扱っている會津八一である。ただし、論者が指導を受けた臨書を基軸にしてひたすらに学び、習得した後に己のオリジナリティを発現していくべきという理念は、我々の現実とは相当にかけ離れた学書法であったと感じられる。

さて、會津八一の経歴、年譜については数多くの研究書によって知られるところであり、改めて本論で触れる必要もないと考えるので、極めて簡略な記録のみを掲げておくこととする。

明治14年（1881）8月1日に新潟市古町通5番町14番戸で生まれた。

新潟市西堀小学校、新潟高等小学校、新潟県尋常中学校を経た後、明治33年（1900）に上京。

病（脚気）を得て帰省、『東北日報』『新潟新聞』の俳句選者として過ごす。

明治35年（1902）、東京専門学校高等予科第一期に入学。卒業後、帰省。

明治36年（1903）、早稲田大学文学部入学。卒業後、帰省。

明治39年（1906）、新潟県中頸城郡板倉町の有恒学舎に英語教師として着任。

明治41年（1908）、初めて奈良を旅する。

明治43年（1910）、有恒学舎を辞任し、上京。早稲田中学校に英語教師として着任。

大正2年（1913）、早稲田大学文学科英文学科の講師となる。

大正9年（1920）以降、足繁く奈良を旅する。

大正14年（1926）、早稲田大学文学部講師として再任、「東洋美術史」を講ず。

昭和6年（1931）、早稲田大学文学部教授となる。

昭和20年（1945）、早稲田大学を辞職し、帰省。後に名誉教授となる。

昭和31年（1956）5月21日に新潟大学附属病院にて永眠。戒名は生前自選の「渾斎秋艸道人」。

會津八一に関する主要な文献・資料は、早稲田大學會津八一記念博物館（東京都新宿区西早稲田1-6-1）と新潟市會津八一記念館（新潟市中央区万代3-1-1 メディアシップ5階）、北方文化博物館新潟分館（新潟市中央区南浜通2番町562）に収蔵されている。冒頭で述べた「学規」も、早稲田大學會津八一記念博物館の収蔵であり、今もその筆の跡を目の当たりにすることができる。

會津八一の書を語る上で我々が念頭に置かなければならないのは、その特異な学書法であり、その学書法に至った彼の生育歴ではないかと思う。全文を仮名書きするという用字法については、幾つかの石碑を例示する中で触れていきたいと考えている。

原典に当たっていないため伝聞引用ではあるが、『書論』（第7号1975年秋）の中の「秋艸道人の人と書について」において、杉村邦彦は次のように述べている。

道人は昭和二十二年の春、新潟史談會の席上、「書道について」というテーマで講演し、幼時の手習いを次のように回想している。

私は小学校へはじめてゆきました時から書き方の時間といふもの程恐ろしいものはなかったのであります。……私は筆をもちましても何も書くことが出来ないのです。……どうして私が字を書けないかと申しますと、ほかの人より下手だといふこともありますが、それは今からよく考へてみますと私は左利きなのです。……しかし、それよりもっと大きなことは、私にはあの習字の手本に書いてあるのをその通りに書くことの出来ない種類の人間であつたらしいのです。

道人は子供の時から左利きであつたらしく、その書には終生左利き特有の筆くせがつきまわっている。さら



図4 押印の画像

左手によって行われているのである。最終の押印は神経を尖らせて行うものであり、それを左手で行うということは、杉村が言う「終生左利き特有の筆くせがつきまどっている」を示す一例として考えることができよう。「左利き特有の筆くせ」については、これまで左利き書字を扱った拙論「伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘Ⅲ 一数的優位の方法を反転させ、数的劣位の側の対応とする矛盾について―」等を基盤にしながら分析、考察していくこととする。

3. 西の京に所在する會津八一の歌碑について

西の京は、文化の中心であった平城京と比較すれば、いわば中心を外れた「鄙」とも言える地である。これに佐保・佐紀と呼ばれる地を加えれば、平城京に並列する西縁一帯を包含することにはなる。論として、西の京から斑鳩、そして佐保・佐紀へと展開することを考えているが、唐招提寺と法隆寺の文化的相関などを考えれば、多少の順の乱れが生じるであろうことを、最初にお断りしておかねばなるまい。

西世古柳平による『會津八一と奈良 一歌と書の世界―』では、會津八一自詠自署の114首を入江泰吉の写真とともに掲載している。目次を頼りに数量を数えると、斑鳩を題材としたものが19首、西の京を題材としたものが10首の計29首となる。この数は、複数回訪れたと考えられる東大寺（25首）、春日野（14首）に継ぐものであり、特に斑鳩への関心度の高さを示すものと言えよう。ただし、最初の調査対象としている斑鳩・西の京を題材にした29首中、歌碑が建立されているものは8基を数えるのみである。

に重要なことに、道人自ら、「あの習字の手本に書いてあるものママをその通りに書くことの出来ない種類の人間であった」と述べている点である。

會津八一が「幼児期、左利きであった」との記述は、他の文献でも散見されるが、執筆を左手で行っているという画像は見つけることは出来ない。学書の中で改善（古くは「矯正」という言い方の中で）されたものと考えられるが、安藤更生による『書豪 會津八一』には興味深い一葉の写真が掲載されている。（図4）色紙に書かれているのは、「おほてらのまろきはしらのつきかぜを つちにふみつものこそおもへ」という歌であり、後述する「唐招提寺にて」と題される二首の内の第一首である。「八一」と署名し、縦長い落款印（「秋草堂」の印かと思われる）を押す姿を捉えているが、通常右利きが行う右手によるものでなく、



図5 唐招提寺歌碑

(1) 唐招提寺歌碑

「唐律招提」と称せられる、鑑真和上の私寺として創建された厳しい戒律の寺である。苦難苦渋の旅の末、来日を果たした鑑真和上は、東大寺で5年を過ごした後に、新田部（にたべ）親王の旧邸宅跡を下賜され、戒律を学ぶ人たちのための修行道場を開設した。それが唐招提寺の創建となる。

現在では、奈良時代建立の金堂、講堂が立ち並び、天平の息吹を伝える古刹であるが、所詮、当時は鄙の地である。「親王の旧邸宅跡の下賜」とはいえ、疎まれた末の左遷とも考えられる冷遇ぶりであった。

正面の南大門には、「唐招提寺」との勅額が掛かるが、惜しむらくは現在掲げられているのは複製で、実物は新宝蔵に移されている。孝謙天皇の宸筆と伝えられる、王羲之風の清涼かつ整齐とした書きぶりである。平成大修理になった金堂を正面に据え、平城宮の東朝集殿を移築・改造したものと伝わる講堂を従え、それら

を囲むように寺域に宝蔵・礼堂、鼓楼・御影堂、開山堂・戒壇が林立する圧倒的な宗教空間である。

金堂に向かって左手の木立の中に、會津八一歌碑は建っている。(図5)

おほてらの まろきはしらの つきかげを
つちにふみつつ ものをこそおもへ

山崎馨の『會津八一の歌』によれば、

松香石と呼ばれる材石は飛鳥の古墳から出土して、飛鳥の里の小川にかかる石橋となつていたといふ。それが増田徳兵衛の手を経て歌碑の材石となった。増田は伏見の酒造家で、道人の藝術に深い理解を示した人である。碑陰の文字「昭和庚寅仲秋 會津八一先生古稀祝賀會建之」は増田の筆に成って、その敬仰の心を今に伝えている。

「會津八一先生古稀祝賀會」は「昭和庚寅」、つまり昭和25年（1950）に開催されている。文字に墨が施されていたのか、それとも雨水等々による汚損か、碑面は黒ずんでいて振り返る人は少ない。碑陰も土・嫩立木に埋没しかけていて、範読しづらい。小林新一の『會津八一の旅』、會津八一記念館監修の『會津八一のいしぶみ』では、建立当時の写真が掲載されており、台石の上に置かれた様子を明瞭に窺うことができる。『會津八一のいしぶみ』には、以下の記述がある。

大正十一年夏、奈良を酷愛した道人は、ここに骨を埋めたいと思い、「留魂の碑」を嫩草山あたりに建てたしと、恩師逍遙、春城宛にその撰文を送っている。没後、昭和三十二年、新潟の埋葬の折り高弟安藤更生、管長森本孝順のはからいでひそかにこの歌碑の下に分骨にした。したがってこの歌碑は文字通り道人の留魂の碑となったのである。

「奈良県観光298号」にも記載があるということであるが、未だ過眼はしていない。ただ、「分骨された」となれば墓碑にも近い。草むし、雑木に覆われるのも時の流れかも知れないが、人々が唐招提寺の歴史を考える縁としても整備が求められると感じている。

「おほてらの まろきはしら」は、いわゆる「エンタシス」と呼ばれる柱のことである。僅かに中央部を膨らま



図6 作品例（「小さな展覧会」図録から）
対し、我が国の対応は正しかったのか。今でこそ人が足繁く往来する西ノ京も、当時は都外れの鄙の地ではなかったのか？ 平城京唯一の遺構、東朝集殿（現在の講堂）を背後に置く、改修なった金堂の軒先から滴下する雨の雫を見つめながら…考えていた。

と記した。論者にとっては、殊更、思い入れの深い寺である。

せた手法は、遠くはパルテノン神殿、近くは法隆寺にも見られ、下から見上げれば直立して見えるという「目の錯覚」を利用したものであり、この歌の視線の先を暗示しているように思える。

かつて論者は、「小さな展覧会」と称した自らの書展において、平成大修理が行われた金堂の軒先から滴る雨滴を一枚の画像として写し撮り、「鑑真和上の夢はるか」との言葉を添えた。（図6）そして、釈文に、

遥か昔の母の思い出語りである。境内で興じていた若者たちを、一人の僧が静かな口調で諭したという。

あなた方にとっては、単なる見物・見学なのかも知れないが、我々にとっては神聖で厳しい信仰の場なのだ。

媚びることのない、孤高とも思える戒律の寺…唐招提寺。奈良女高師で学んだ母が、何度となく思い出の中で触れた寺である。初夏には御廟前に和上ゆかりの揚州から贈られた瓊花が、ひっそりと花開く…。

十数年…六回目にしてようやく渡日した 鑑真和上に



図7 薬師寺歌碑

(2) 薬師寺歌碑

今や異次元とも思える華やかな白鳳伽藍が聳える大寺であるが、論者が最初に薬師寺を訪れたのは、学生時代のことである。リュックサックを背負い、バスに乗り、到着した薬師寺は、仮金堂と東塔のみが存在するような荒れ果てた堂宇であった。多分、小学校での修学旅行でも立ち寄っているのではないかと思うが、残念ながら記憶には残っていない。荒れ果てた堂宇の復興に尽力し、今の薬師寺の基礎

を築いたのが、高名な高田好胤氏であることは知られている。（写経勧進による白鳳伽藍復興事業等）当時、TV等々のメディアに登場し、分かり易い言葉でコメントを述べられていた姿は印象的であった。寺の復興、そして仏教の普及に関することなら、総てのことに取り組むという強い意志を、その姿から感じたものである。その「人に説く」という取り組みは、現在の修学旅行生への説話や講話という形で引き継がれ、宗教的修行の場に加えて幅広く人々に親しまれている。前任の兵庫教育大学時代、講演会講師として松久保伽秀氏を招聘するため薬師寺を訪れた。夜半、雨降る中で伽藍を見上げ、「高田が本当に考えていたのは伽藍の復興ではなく、人間や人間の心でした」と語った松久保氏の言葉は印象的であった。

會津八一歌碑は、西塔の北側に、東塔下から移築された佐佐木信綱歌碑と並立する。（図7）

信綱

遊ぶ秋の やまとの國の 薬師寺の
塔の上なる 一ひらの雲

すゐえんの あまつおとめが ころもでの
ひまにもすすめる あきのそらかな

八一

佐佐木信綱氏の和歌は極めつけの名歌であるが、失礼を承知で言うならば何分にも読み辛い。漢字仮名交じり、時には変体仮名を交えて書かれており、碑面への配置等々は考えられてはいるものの、文字を判別することさえ困難な部分がある。それに対して、會津八一歌碑は「読める」ということを主眼にしているようで、読み易く伸びやかである。西世古柳平の『會津八一と奈良』には、「すゐえんの」の歌の墨書例が示されている。規格・大きさが示されていないので判然とはしないが、縦横の比率から考えれば、色紙に書かれたものではないかと思われる。ただし、字形・配置は薬師寺歌碑と同様であることから、この墨書を横広の碑面に写す際に、行間を広めにとって配置したのではないかと考えられる。碑は平成11年（1999）に、秋艸会によって建立されて。秋艸会は、會津八一の学芸への理解を深めるという趣旨で設立された会である。

會津八一が謳い上げる冒頭の「すゐえん」は、塔頂の「水煙」のことである。（図8）かつて自らが学徒であった時代に「美学美術史」の講義の中で、かのフェノロサが「凍れる音楽である」と評したと聞かされた。また以降



図8 薬師寺三重塔水煙

も繰り返し耳にした称賛の言葉でもあるが、残念ながらフェノロサの記録の中に未だ見出すことはできない。ただ、フェノロサの賛辞があろうが、あるまいが、正にこの天へと展開する水煙の美しさは、時代・歴史を越えて振り仰ぐものの心を打つものであろう。薬師寺による解説によれば、最初に木型を作り、後に鋳型として鋳造したということであるが、高さ193cmの大きさを持つ巨大なものである。見上げる水煙は遙か天空にあり、舞い飛ぶ天人の像の一々を地上からは確かめることも叶わない。そのような状況下で我々が気付くのは、単に強い信仰心として片付けることのできない、頑ななまでの美意識である。

先に掲げた會津八一記念館監修による『會津八一のいしぶみ』の、「薬師寺歌碑」の項目を叙述しておられるのが、奇しくも松久保秀氏の父である松久保秀胤氏（当時 薬師寺管主）である。そこには、現在は並立する形となっている會津八一歌碑と、佐佐木信綱歌碑が選定された経緯等々が詳しく述べられている。

まとめにかえて

気難しく偏屈とさえ称せられる會津八一である。さまざまな書物に掲載されるいずれの画像にも笑顔一つなく、それこそ「扱いにくい人物」との印象を確信させる以外の何ものでもない。ところが、彼の著述や和歌は、そんな気難しさなどみじんも感じさせない、繊細で伸びやかな感性が満ち溢れている。このような状況から考えてみると、會津八一は偏屈な人間というよりは、頑ななまでの純粹さで己の感性を守り抜き、さまざまな学芸と対峙し続けた人間と位置付けることができるのではないか。多少、軽薄な表現になってしまうかも知れないが、現代風に言うならば「ストイック」という表現が当たるのであろう。

今回例示した歌碑を含め、大部分の歌が「仮名書き」という特有の表記によって書き綴られる点について考えていて、ふっと思い出したのは『万葉集』について論じていたときのことである。巻1の歌番号0020、有名な額田王の歌を参考として例示しておく。

天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

茜草指 武良前野逝 標野行 野守者不見哉 君之袖布流



図9 新潟市寄居浜海岸に立つ會津八一

題詞は漢文を読み下すと同様に「天皇、蒲生野に遊獵するとき、額田王の作る歌」と読まれる。しかし、歌本体は、「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（あかねさすむらさきのゆきしめのゆきのもりはみずやきみがそでふる）」という発音のままに表記される。つまり、掲げる題詞では文化を招来した中国への敬意を表しつつも、自らの歌は自らの声（音）で詠みたかったのではないかと、ということである。未だ気付きの域でしかないが、今後、會津八一の書道観と合わせ、考察を進めたいと考えている。

植田重雄の『會津八一とその芸術』の扉には、新潟市寄居浜海岸に立つ會津八一の写真が掲げられている。（図9）思わず手を止めて見入ったが、會津八一の人となりを見事に写し撮った一枚ではないかと思う。日本海特有の海風の中で立ち尽くす彼は、遠望する視線の先に、一体、何を見つめ、何を見据えていたのだろうか。

【収集資料】 *引用参考文献としてだけでなく、資料としての意味合いを含めて記載している。

- ・『書豪 會津八一』 安藤更生 著 1965年10月25日 株式会社二玄社
- ・『會津八一書論集』 長島 健 編 1967年1月16日 株式会社二玄社
- ・『會津八一とその芸術』 植田重雄 著 1971年4月30日 早稲田大学出版部
- ・『書論 特集 會津八一』 第7号 1975年11月15日 書論研究会
- ・『會津八一の世界』 宮川寅雄 著 1978年9月5日 株式会社文一総合出版
- ・『越佐の墨芳』 内山喜助 宮 栄二 山本修之助 渡辺慶一 渡辺秀英 監修
1981年5月25日 新潟日報事業社
- ・『會津八一 書の指導』 渡辺秀英 川村佐武郎 共著 1981年8月1日 株式会社考古堂書店
- ・『會津八一の書と風土』 長坂吉和 著 1984年6月15日 株式会社考古堂書店
- ・『會津八一と奈良 -歌と書の世界-』 西世古柳平 著 1992年10月15日 株式会社二玄社
- ・『會津八一の歌』 山崎 馨 著 1993年7月5日 有限会社和泉書院
- ・『會津八一の旅』 小林新一 著 1997年12月25日 株式会社春秋社
- ・『會津八一逸話集』 渡辺秀英 著 1999年2月10日 新潟日報事業社
- ・『會津八一とゆかりの地』 和光 慧 著 2000年1月12日 株式会社二玄社
- ・『會津八一のいしぶみ』 財団法人會津八一記念館 監修 2000年11月15日 新潟日報事業社
- ・『會津八一』 大橋一章 著 2015年1月25日 中央公論新社